

『輪をつくる』 秀歌抄出三十首

* 選考委員による抄出

お尻の穴を見ているような他人の恋 本を読むため海へ出かける

商談のごとく時折しずまって銀杏並木は葉っぱを落とす

神様が耳洗う朝の玄関にただ立っていた子どもの時間

呼ばれない飲み会増えて水底をするりすると夏がはじまる

いつもの母ちゃんに戻って、と祈る 少女とはみんなそうして一度は祈る

強く鳴いてながくしずもる初蟬の雨の少なき梅雨が終わりぬ

学校に来るだけでいいひとになり職員室に裸足で入る

紫陽花のにおいかすかに膨らんでひとりで食事をするための皿

アンコールでみんな出てくるこれまでに出会ったコンビニ店員たちが

女子が輪をつくる昇降口の先、花はひかりの弾薬庫として

ほそながいかたちではじまる飲み会が正方形になるまでの夜

小倉駅で祖母のこいびと待つ日中 金平糖を買ってもらいき

ぜんぶじぶんの目で見てきたよばあちゃんが豆大福をやわらかく裂く

妹がいつも疲れている夏よ看護師さんとひとと呼ばれて

わたくしがへこんでいれば安心すると友は言いたり春を笑って

働き続けることは食べ続けることだ胸に小さな冷蔵庫置く

八つのうち六つが「みだりに」で始まっている禁止事項読む船の客室

境内の隅に貼られた習字展に「百科事典」の文字が並びぬ

友人はいませんでしたと告げるときお見合い相手の目は穏やかで

口をきいてくれなくなった女子のことを椋鳥の目で古藤くんが話す

乳飲み子の姉妹とへそくり一千万円抱いて出奔した祖母の夏

ふたりの子のひとりの死までを見届けて祖母の口座の残金二万円

心情を言葉で交わすやりとりを早送りしてキスシーンは見る

自分より少し不幸でいてほしい人に短いメールを送る

時間にも身体があれば晩秋はただ一本のそのふくらはず

「才能があるんやねえ」と父が言うそのままじりの黄色いにごり

顔を仕舞う真白き箱がひとつありその箱もまた顔と呼ばれる

「時間があつたら電話くれ」という兄からのメール無視して帰り着く部屋

ストーブに耳かきの先あたたためて耳かきをする真冬の日

死んでいくからテレビはつけてほしい真っ白な父を正面に向ける